慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 序 |
| Sub Title | |
| Author | 山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1997 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.70, No.2 (1997. 2) ,p.5- 7 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 奈良和重教授退職記念号 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19970228-0005 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 序

私は、奈良和重先生に対し敢えて「大いなる誤解」をしている。先生の精神的営みのなかでは時間が停止している、あるいは時間を超越しているというべきであろうか。思想史の専門家にむかってそう言うのであるから、これが誤解であることは間違いない。これは先生の学問とともに、生き方についても言えることである。研究室で奈良先生に会うと、私のような後輩に対しても気を配り、丁重に挨拶される。先生の誠意は十分に伝わってくる。しかし、先生の心のなかには、このような形而下の日常性を離れた空間が存在するように思われる。先生が学問に沈潜するとき、先生には自分であって自分ではなくなる時間が在る。そこでは、外界との関係における時間が停止し、先生の思想的営為が展開される。奈良先生の文章に現れた論理と勢いのなかにこのような思索の過程を見出すことができる。また、先生が若いときに翻訳された本を見ると、一つの言葉の訳語を見出す、否創り出す過程で我を忘れて苦闘されている先生の姿が伝わってくる。伝記作家の対象とする人物に対する観察は所詮その作家の器の大きさによって決まる。そうであるとすれば、このような奈良先生に対する見方も私の限界を示すものであるか、あるいは自分に欠けているものを先生の姿に投影した幻影にすぎないのかもしれない。

私と奈良先生との最初の学問的出会いは、一九六二年に刊行された『年報政治学』に発表された「非西欧諸地域の政治研究序説　アメリカにおける研究状況を中心として」と題する先生の論文においてであった。ここで先生は、Gabriel Almond の *Politics of Developing Nations* を中心として自らの論理を展開された。先生のその

後の研究の発展を見ると、この論文は必ずしも先生の仕事の中核をなすものではない。しかし、ウェーバーやマルクスを下敷きにして政治史の研究を行っていた私にとって、そこで紹介された比較政治学の方法は大変新鮮であった。中国政治史の研究者として私は未だにこのような比較政治の方法に反発しているが、先生のこの論文はその後アメリカに留学したときに良き導き手となった。

奈良先生の一貫した思想的営為は、マルクス主義からポスト・モダニズムにいたる時代の思想的潮流をとりあげ、それらにおもねることなく、批判的に対峙することであった。これらの仕事は、先生の主著『理性と反抗――反時代的批判論集』、『イデオロギー批判のプロフィール――批判的合理主義からポストモダニズムまで』のなかに結実している。

一つの党派の批判は、もう一つの党派を生み出す。先生が分析の対象とされたイデオロギーはまさにこのような党派性がもっとも先鋭に現れてくる領域である。そこでは中立はありえない。対象を批判しつつ、なおかつ批判の対象と対話を成立させることの難しさを、私自身政治史の研究者として常に味わっている。先生は、思想のドグマ化に抗して批判的姿勢を堅持されてきた。それは、時代の動向に右顧左眄することなく真実を追求する孤高の人にして初めてできることである。この批判的態度を支えているのは先生の理性である。先生は理性を支える非合理性を意識しつつ、合理性を追求された。さらに、このことによって先生自らの理性を支える非合理性とは何かが問われることになる。それは究極的には、われわれが人間の理性を越えたものとどのような関係を持つかという問題に帰結する。しかし奈良先生はあくまで政治思想レベルで人間の限界内に踏みとどまろうとする。そのとき、先生の批判的態度を支えてきた理性はいかなる働きをするのであろうか。ここに、近代的「啓蒙」のパラドックスをひき受けざるを得ない苦しみがある。

奈良先生のいま一つ重要な仕事は、翻訳と書評である。巻末の著作目録のなかに、広い範囲の現代思想家の著

作に関するおびただしい量の翻訳と書評を見出すことができる。これらは論文執筆の余技ではない。先生は、学問的営為の一環として欧米の現代政治思想の翻訳を自らの使命と考えられてきたのである。

私は一九六五年に法学部助手となった。初めて与えられた薄暗い研究室には四人が同居していた。奈良先生はそのうちの一人であり、すでに新進気鋭の助教授であった。その先生が本年三月をもって定年退職される。寂しさを禁じえない。先生は法学部において四一年にわたり政治思想史の研究と教育に携わってこられたことになる。奈良先生が今後ともお元気で研究を続けられることを願う次第である。

一九九七年 二月

法学部長　山田辰雄